

第1回三女子大学連携相互評価を終えて

2010年9月の三女子大学懇談会で話題として出された「三女子大学連携相互評価」が、実務担当者の打ち合わせを含めて3年をかけて1回目の評価を終えようとしている。相互評価実施について、その経緯と1回目の評価を終えての感想及び今後の方向性について述べたいと思う。

2010年9月に日本女子大学で開かれた三女子大学懇談会で、外部評価が話題となり、三女子大学の関心を示すところとなった。年明けには学長間で書簡を交わし、実務担当者の打ち合わせを始めることとした。その後、東日本大震災が発生し、各大学ともその対応に追われることになり、年度を改め、2011年4月に第1回目の打ち合わせ会が開かれた。大学は、自己点検・評価を改善改革へと結び付けていく内部質保証システムの構築が求められるという共通認識のもと、相互評価の話し合いが進められた。6月には、「FD活動」をテーマとすることが相互評価委員会で決定され、相互評価に関する申し合わせと実施要項についての検討も始められた。評価の質を高めるため外部の有識者を評価委員に含めることも検討された。しかし、今回は初回ということもあり、各大学から評価委員を出すこととし、2011年度末に実施要項と多少自由度をもたせた各大学の評価項目も決定された。2012年5月には相互評価結果報告書の様式なども定められ、7月に各校からFD活動についての自己点検・評価報告書が相互評価委員会に提出された。我々評価委員は、自大学以外の2校について8月下旬までに評価結果案を作成した。9月12日に、日本女子大学において、意見交換会を開催し、書面審査では不十分であった事項や事実誤認について確認し合った。意見交換会を受けて、各評価委員は評価内容の再確認を行い、評価結果（最終案）を11月初旬までに取りまとめた。今回、ご提示する評価結果は、以上のような活動を経て出された相互評価結果である。

震災を挟み、打ち合わせ段階の調整に時間がかかったため、評価を終えてみて大変であったというのが正直な感想である。しかしながら、他二女子大学の自己点検・評価報告書とその評価から学んだことの大きさから考えると、今回の相互評価が有益であったというのが実感である。今回はあくまでも試みとしてなされたものであり、是非いくつかのテーマについて三女子大学連携相互評価の実績を積み上げていきたいと思う。

最後に、3年にわたった三女子大学連携相互評価の推進を支えてくれた事務担当者に感謝をし、その労に報いたい。

2013年1月18日

三女子大学連携相互評価委員

津田塾大学 来住伸子

東京女子大学 大山淑之

日本女子大学 小山高正

【 東京女子大学 】 大学に対する評価結果

相互評価委員 津田塾大学 情報科学科 来住伸子

【総 評】

東京女子大学「FD活動」自己点検・評価報告書により、非常に積極的にFD活動を推進している東京女子大学の姿勢を知ることができ、感銘をうけた。

1996年度の「学生による授業評価」アンケート実施をはじめ、2002年度FD委員会設置など早くからFDに積極的に取り組んでいる。また、FD委員会の活動も活発で、その範囲も幅広く、FD活動の効果自体の評価も行うなど、全学的に非常に積極的に取り組んでいる。

1. FD活動の目的

(所見)

FD活動の目的は、東京女子大学FD委員会規程に明記されている。

(優れている点)

上記の規定の第2条において、FD活動の内容を詳細に記述している。また、教授会終了後に、「FD活動に関する説明会」を開催し、教授会出席者のほぼ全員にFD活動の目的、内容を説明している。

(努力課題)

特に指摘する事項は無い。

2. FD活動を担う組織

(所見)

東京女子大学FD委員会を設置している。

(優れている点)

- ・ 2002年度のFD委員会の設置など、早くからFDに関する組織整備を行っている。
- ・ FD委員会に、学部長、教務委員長はじめ、教育活動に責任ある立場の教員が参加している。
- ・ FDに関する説明会、シラバス作成に関する説明会など、教員への啓蒙活動をFD委員会が直接実施しており、非常に積極的な活動を行っている。

(努力課題)

F D委員会の8名のうち、4名は学長が指名した委員であるが、各学科から委員が選出されるよう、配慮する必要がある。

3. F Dの活動状況

(所見)

F D活動として、(1) 授業評価アンケートおよびそれにかかわる活動、(2) 教員相互の授業参観、(3) 学内研修等、(4) シラバス、(5) 新任教員サポート、(6) 全学共通カリキュラム 1年次教育における個別の取り組み、などを実施しており、非常に広範囲のF D活動を実施している。

(優れている点)

- ・ 授業評価アンケートの集計結果を学生と教職員に公表しているだけでなく、検討会を実施し、検討会報告書を作成することにより、授業評価の結果を授業改善に結びつける活動を実施している。
- ・ シラバス説明会を実施することによりシラバス記載内容を改善するとともに、シラバス記載内容の確認体制を設けている。
- ・ 全学共通カリキュラムにおいて、統一シラバス、共通テキストなどの作成を実施し、統一した授業運営を行う活動を行っている。
- ・ F Dに関する説明会の実施、F D活動に関するアンケートを実施し、F D活動自体の評価活動も行っている。

(努力課題)

- ・ F D活動に関する教員アンケートにおける評価が十分に高くないと報告されている。この点は努力すべきであるが、学生による授業評価アンケートより、教員からの評価は低くなりがちであり、長期的な観点で、F D活動の評価に取り組むべきと考える。
- ・ 全学共通カリキュラムの「Communication Skills A,B」及び「コンピュータ I」では、F D活動の一環として、統一シラバス、共通テキストの作成を行っている。これらは、授業の質の維持に大きく貢献していると考えられるが、学生の多様化への対応、たとえば、学生の到達度に基づいた教育、学生の専攻分野や興味に合わせた教育などへの配慮が、今後必要であると考ええる。

以上

2013年 1月 8日

【 東京女子大学 】 大学に対する評価結果

相互評価委員 日本女子大学 心理学科 小山高正

【総 評】

FD活動の目的は、キリスト教精神による人格形成を基礎に定められた教育理念に則り、「東京女子大学FD委員会規程」に定められている。その目的は、教員間で概ね共有されている。

FD活動を担う組織として、FD委員会が設置され、その取り組みについても、FD委員会規程に明示されている。ただ、教員の意識調査から、PDCAが回る組織としては、改善の余地が大いにあることが窺い知れる。しかし、授業評価に基づいて各部署で行われる検討会などを見るとかなり機能しているように思える。また、FD委員会の構成員に、教学の運営責任者が入り、事務系の責任者も入って、委員会は強力な体制になっている。

FDの具体的活動については、授業評価とその検討会、教員相互の授業参観、学内研修、シラバス作成、新任教員サポート、全学共通カリキュラム、大学院の授業と学位論文指導、別に丁寧な点検・評価がなされている。すべてにわたって何らかの効果があがっていることが示され、東京女子大学がFDに真摯に取り組んでいること、PDCAを意識して点検・評価していることが理解される。さらに、教員個人の教育方法改善にFD活動が活かされているかについても検討されており、6割から7割の教員が上記の活動が授業改善に役立っていると答えている。PDCAをさらに確実なものにすべく、カリキュラム・マップや科目ナンバリングの導入が検討されている。

FD活動の情報公開については、既に授業評価アンケート報告書がホームページ上で公開されているほか、今後は教員の研究業績に加えて、教育業績の公開についても検討が進められている。

以上、「FD活動」自己点検・評価報告書から、総じて、東京女子大学の教育質向上への意欲的で、真摯な姿勢を感じることができた。特に、学部、大学院をまとめた強力なFD委員会の組織をもち、全学的に組織的にFDに取り組んでいることは高く評価されよう。東京女子大学のFD活動への取り組みの熱心さは、授業評価アンケートに早くから取り組んでいること、アンケート結果を関係教員間で検討し、学生に還元している点、さらに報告書をホームページ上で公開している点にも現れている。本学としては、学ぶところ大である。

現状の活動に多くの時間が割かれていることとは思うが、今後の大学教育を考えると、新たな教授方法、学修支援の仕方にも取り組んでいく必要もあるので、そのような研修も

盛り込んでいくと良いように思う。また、教員の国内、海外での研修もFD活動として位置づけることも教員への励みとなるように思われる。

FD活動に関する教員アンケートは、FD活動を検証する上で効果があることがよく分かった。また、このアンケートから、教員の意識の中に、まだ十分FD活動が根づいていないことも明らかになり、FDの難しさを改めて認識させられた。このことの解決には、特定の教員に対して意識の向上を迫るだけでは十分でなく、学内のFDに対する文化を全体として浸透させることが必要なのであろう。ありふれた表現であるが、不断の地道な活動ということになるだろうか。

今回の東京女子大学のFD活動に関する自己点検・評価報告書から、多大な気づきを頂いたことを感謝申し上げたい。

1. FD活動の目的

(所見)

FD活動の目的に大学の教育理念の実現が謳われているなど、東京女子大学の一貫した教育研究の姿勢がうかがわれる。FD委員会の具体的活動についても、多くの項目が盛り込まれていて、FDへの熱心な姿勢を感じるができる。そのことが授業評価アンケートへの早期の取り組みを促したことが想像できる。組織的にも、学部・大学院が一体になってFD活動に取り組んでいる点は、一貫性の意味からも評価される。本学では、大学院における専攻間の専門性の違い（特に実験系と非実験系）から、FD活動の足並みをそろえることに難しさを感じているだけに、今後の参考としたい。

(優れている点)

- ・ FD活動の目的に「大学の教育理念の実現」が謳われている。
- ・ 委員会の審議事項が、具体的に示されている。特に、授業参観、活動の点検・評価、報告書の刊行などが、規定作成のはじめから活動内容として盛り込まれている。
- ・ 委員会の構成員に、大学運営の責任者が多く含まれ、FD活動実施がスムーズであることが予想される。
- ・ 教員の任意ではあったが、1996年度という早い段階から学生による授業評価を実施した。
- ・ 「FD活動に関する教員へのアンケート」を実施し、FD活動の目的を教員間で共有しているかについて検証をしている。また、それは活動の周知にも有益である。

(努力課題)

特に指摘する課題は見あたらない。

2. FD活動を担っている組織

(所見)

FD委員会に教学運営責任者が入り、担当事務の責任者がサポートする体制で、組織が非常に強力である。

FD活動に関する教員アンケートの結果から、FD活動のPDCAが組織的に機能していないと判断されているが(Q4「組織的にFDを活性化し教育内容を改善する仕組みが整っている」に対する回答で「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の計が43.9%、Q5「組織が機能している」に対する回答で「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の計が42.4%)、検討会までやっているのにどうしてなのかが理解できない。教員の意識の中にFD活動が残っていないのか。FDとは本来そういうものなのか。大いに考えさせられる。

「授業評価アンケート報告書」は、熱心な学科・専攻とそうでもないところがあるようだが、学生の視点を意識しながらまとめられていることに大いに敬服した。

(優れている点)

- ・ 「授業評価アンケート報告書」を学生の視点を意識しながら、しっかりとまとめている。
- ・ 上記「報告書」をまとめる上で、学科、専攻レベルでアンケート結果の検討会を行っている。
- ・ 学部長、共通教育部長、大学院合同研究科会議議長、教務委員長など教学を運営する責任者が教学担当事務の責任者の陪席の下でFD委員会を動かすという強力な組織である。

(努力課題)

- ・ 特に指摘する課題は見あたらない。

3. FD活動の具体的状況

(所見)

授業評価アンケート、シラバスについては、FD委員会で不断の点検・評価をして改善が図られている。各学科・専攻のレベルで毎年検討会が実施され、それを元にした授業評価アンケートの報告書の内容が一層充実したものになっている。

授業評価アンケートで1つ気になった点は、設置基準上は講義・演習科目1単位につき45時間の学習時間が割り振られているが、それに基づけば、4時間以上の教室外学習時間が必要となるにもかかわらず、教室外学習時間を4時間以上から1時間未満まで尋ねているところであった。教室外学習の充実を図るため、『シラバス作成要領』に基づく説明会で、具体的に教室外学習の方法について提示している。

F Dに関する学内研修も熱心に取り組まれているが、F Dに関する説明会、シラバス作成に関する説明もF Dの研修会とする認識は私共にはなかった。研修内容については、多種多様なものへ発展させる余地があるだろう。学内研修に外部講師を呼ぶなどして、現在F D活動で話題になっている新しい授業方法（Project/Problem Based Learning, Active Learning など）や学修支援（Portfolio, e-Portfolio, web-CT など）、さらにカリキュラムマップなどカリキュラム整備の方法についての研究をしても良いように思う。

大学院教育における工夫、充実化については、どのようにその効果を評価するかが、いずれ課題となるであろうことが予想される。

教員の国内研修、海外研修なども、「教員の資質の向上を図るための方策」としてF D活動に位置づけても良いのではないか。

F D活動に関する教員アンケートによって、F D活動の効果について測定している点は、大いに評価されよう。

（優れている点）

(1) 具体的なF D活動は実質的に効果があがっているか。

- ・ 授業評価アンケートを前期・後期で学科科目とそれ以外の科目というように、科目配分をしている点は合理的である。それに合わせて、アンケート報告書も、2年ごとに作成している点も合理的であるといえる。
- ・ 毎年、授業評価アンケートに対する検討会を学科・専攻、科目運営委員会、女性学研究所の単位で行っている。授業評価アンケートを実際に活かそうという姿勢が感じられる。
- ・ 授業参観への参加する教員が6割（概ね70/120）ほどいる。参加率は高い。
- ・ シラバスに、教室外の学習方法、成績評価基準の項目を設けている。
- ・ 新任教員のサポートを組織的に行っている。
- ・ 1年次の全学共通カリキュラムであるCommunication Skills A,B、コンピュータIについて、全教員が統一シラバスに基づき、自作の統一テキストを使用して授業運営を行っている。また、統一テストによって到達度が測定されている。学生の満足度も高い。
- ・ 大学院教育において、毎年度末に「授業および論文指導についての検討会」を専攻ごとに実施し、報告書をまとめて、大学院合同研究科会議議長に提出され、その後F D委員会、自己点検・評価委員会に報告されている。また、専攻主任による報告書が大学院担当者全員で共有されている。
- ・ また、一部研究科前期課程では、専攻や研究分野の共通科目を設けて、個人指導から集団指導の体制を整えつつある。さらに、論文指導演習なども新設して充実を図っている。
- ・

(2) 教員個人の教育方法の改善にF D活動が活かされているか。

- ・ 「F D活動に関する教員アンケート」によって、学内研修の効果が検証されている。

(3) 教学における PDCA サイクルの中に F D 活動を位置づけ、生かされているか。 (教育理念の共有や教育目標の見直し等に生かされているか。)

- ・ 学部統合と再編をにらんで、早い段階から全学共通カリキュラムの改革に全学的、組織的に取り組んできたことに加え、不断の見直しを行うシステム (全学共通カリキュラム運営委員会、さらに将来計画推進委員会のもとに全学共通教育部長を座長とするワーキング・グループの活動など) の構築がなされている。
- ・ カリキュラム・マップ、科目ナンバリングの導入を検討している。

(努力課題)

特に指摘する課題は見あたらない。

4. F D 活動の積極的な情報公開

(所見)

F D 活動を積極的に学内外に公表しようという姿勢は、自校の教育研究への自信の現れであろうが、それ以上に、社会に対して説明責任があるという認識の現れであって、東京女子大学の教育の質向上に向けての真摯で誠実な取り組みが感じられる。

(優れている点)

- ・ F D 活動を公開して、社会に対する説明責任を果たそうとしている。
- ・ 「学生による授業評価アンケート報告書」をホームページに掲載し、公開している。

(努力課題)

ホームページ上での情報公開について、大学としては積極的に取り組んでいるにもかかわらず、トップページに情報公開独自のバナーが設けられておらず、その他のメニュー内に多く並ぶ項目の中に埋もれてしまっている。大学の積極的な姿勢が薄められてしまっている。

以 上